

〔翻 訳〕

将軍の領土に乗り込んだアメリカインディアン(3)

—フレデリック ショット 著 (P.185~197)—

中 川 操

利尻島：冒険始動

『船長や乗組員は強く熱心に[思いとどまるよう]忠告してくれたが、ボートに乗り移った... 仲間たちは、私を彼らに結びつけている係留索の綱の結び目をほどこうとはしなかった... 私は仲間から顔をそむけ、全員とつながれている綱を自分で切らねばならなかった。この綱に、仲間たちの真の友情から今にも破裂しそうな、強く、じんとくる思いやりの情を感じていた。「無事を祈っているよ、マック！」彼らはふるえる声で、私にながの別れを告げた』¹⁾

1848年6月27日に、マクドナルドは、北海道の沖で歴史上の人物になった。上記「日本回想記」(The Narrative)²⁾には首尾一貫しない点が多くみられるが、この日以後、1849年春に日本を去るまでのマクドナルドの行動は、大変生き生きとしていて、詳細で、正確である。それは、マクドナルドの日本滞在の最初の2ヶ月は、現存している自筆の日記に基づいているからである。更に、彼の物語は、日本側の記録や、その当時の他のいくつかの記録によって、歴史的三角法の手法で、実証することができるからである。基本の事実には、異論を唱えることはできない。マクドナルドは「プリマス」号に乗船していた24歳の船員であった。殆ど1年近く前に、マクドナルドは「航海術を教えてもらいたい」そして「日本の陸地の見える沖合で、帆で航海できる小さなボートで、日本に単身潜入する許可をもらいたい」と船長に願い出ていた。仲間の船員たちの考えでは、彼は未知の世界へ、確実に死が待っている国へと入って行こうとしていた。ここへ来るまでの大変な距離の航海と、途方もない危険を生き延びてきたというのに、その上、恐らく一財産になったと思える、全航海での給金全部を投げ捨ててまで、マクドナルドは、こんな危険な権利の入手を船長

1) ウイリアム・ルイス、村上直次郎編集 マクドナルド「日本回想記」

Ronald MacDonald: The Narrative of His Life, 1824-1894, Oregon Historical Society Press (1990) pp. 150-151

〔附〕の訳は富田直次郎訳：マクドナルド「日本回想記」1993年版、刀水書房による。日本語名の省略は「日本回想記」とする。

2) ショット氏著“Native American in the Land of the Shogun”の本文では“the Narrative”と表記されている。

に申し出ていた。この事件の5ヶ月後に書かれた、“E.P.F.”という頭文字の、ある船員仲間が残した別の記事が、ホノルルの「フレンド」紙に残っている。『美しい朝の9時だった。「プリマス」号は遠くに薄い霞に包まれた、ある島の沖合に停泊していた。マクドナルドは、船に帆が装備されている数隻のボートの中から、乗り移るボートを選ぶようにと指示されていた。そのボートは、船体の甲板より上部に吊るされている“センター ボード ボート”（帆船の垂下竜骨のついたボート）という名のボートで、その種のボートの中では一番頑丈なボートだった。仲間の船員たちは、小さなボートを下げ、その中に必要な品物を入れた。積み込まれた品々は「四分儀、縮図、二挺のピストル、飲み水の入った小さな二つの樽、肉の入った樽、多量のパン、錨、35ヒロの長さの曳き綱とオールであった。マクドナルドの大きな貴重品箱は、多種類の本で一杯であった』マクドナルドはボートに乗り込んだ。「プリマス」号はしばらくの間、そのボートを曳船したが、まもなく、マクドナルドは

『曳き綱を外した。そして、永久に、われわれから離れて行った。彼の乗った小さなボートは、矢のように、波を乗り越えて突き進んで行った。この勇敢な冒険家の最後の姿を見ようとして、全ての船員は、船の後尾の甲板に集まった。彼は帽子を脱いで、振ったが、無言であった...彼は、母船の甲板から仲間に見まもられながら、われわれの視界から永遠に消えてしまった。島の北側の小さな入江に入って行く姿が、我々が見た小さなボートの最後の姿であった...後甲板の船員全員が、こんな状況で船を去る仲間の姿を、悲しみの気持ちで見送っていた』³⁾

この船乗り仲間は、マクドナルドのこの時のことを、上記「フレンド」紙で次のように記述している。「身長は約5フット7インチぐらい、太り気味で、髪の毛は直毛で、色黒だった。彼は洋上で遭遇する危険や災難に対して、冷静に、十分対処できる教養と根性を持った素晴らしい船乗りだった...こんな風に、マクドナルドが船を去ったことで、誰もエドワード船長を責めることはできない。エドワード船長は、ボートが船側から降ろされた時でさえも、なんとか、この無謀な冒険を止めさせようと説得したが、マクドナルドは、決心を変えようとはしなかった」⁴⁾

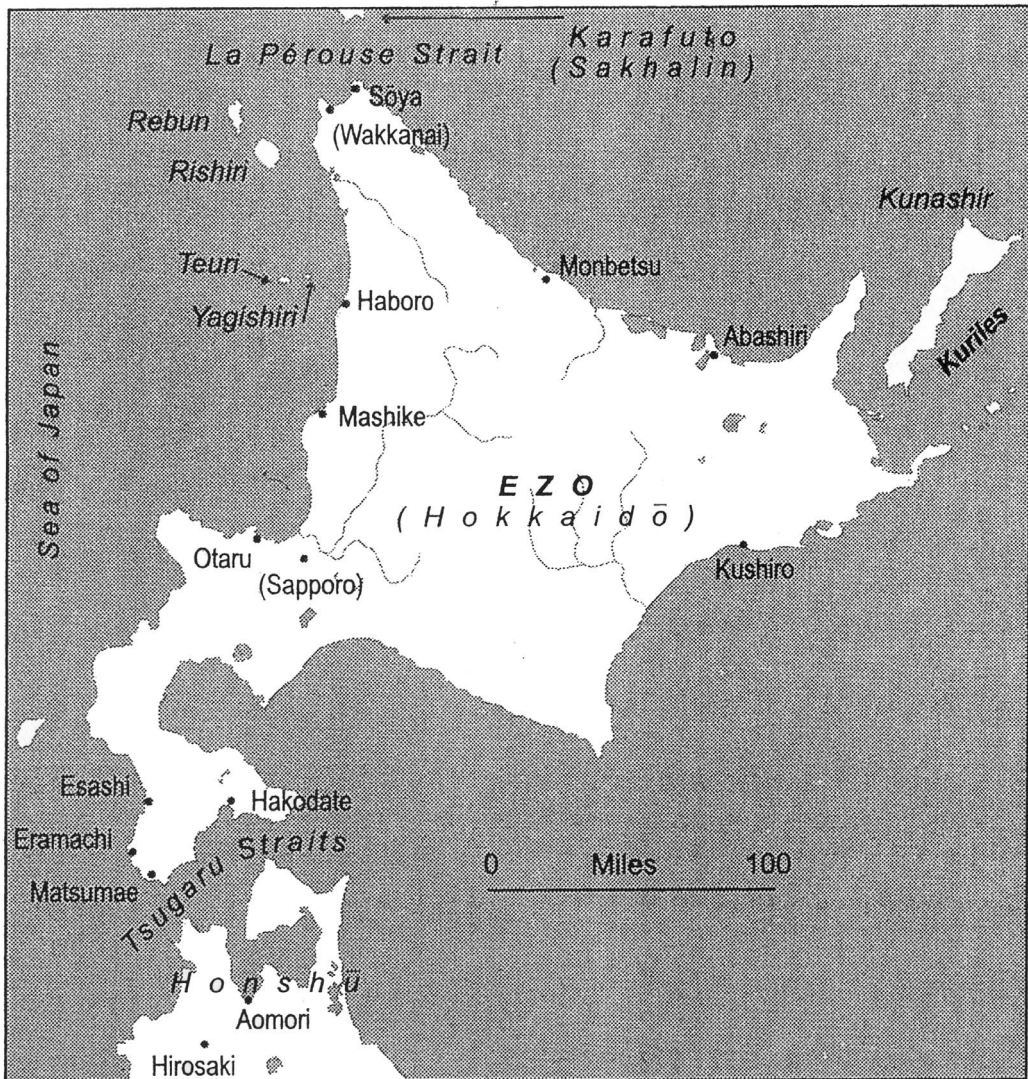
1849年に「プリマス」号で、サッグ港に帰り着いた時、船が帰国の途上に向かっていた時のことだった、と前置きして、「或る朝、マクドナルドが船尾の私の許にやって来て、下船させて下さいと申し出た。勿論、私は、その言葉を聞いて、呆気にとられた。帰途の途中、サンドイッチ諸島（ハワイ諸島）に立ち寄った時に船を降りる、とっていたからだった。彼は、ボートと食料の供給を頼んできた。そこで、私は、彼との約束を思い出し

3).4) 1848年12月1日号の「フレンド」紙に“A Sailor’s Attempt to Penetrate Japan”というタイトルで掲載された。



East Asia and Japan.

日本・東アジア



Hokkaidō, formerly known as "Ezo."

蝦夷（現在の北海道）

た。彼は、自分は約束通りの仕事の条件を果たした、と主張したので、私としては、私の方の約束を遂行せねばならなかった⁵⁾というエドワード船長の言葉を引用している。

エドワード船長は、そんな申し出は「無謀で、馬鹿げた企て」だ、と主張したが、マクドナルドは、船長の言うことを聞こうとはしなかった。船長はやむを得ず、ボートに、彼の言うなりの品々を積まないわけにはいかなかった。約1ヶ月の食料と飲み水に加えて

5).6) Dale L., Morgan 編集 "In Pursuit of the Golden Dream" p.14 ただし、上記の書物はかなり年数がたってから出版されたので、"Gardiner" からの当時の記録を引用したものと思われる。

「私の経験から考えられる、身の安全のための諸準備を教授すること」を約束せざるを得なかった。更に、鉄砲と弾丸、魚釣り道具と、ボートの中でも料理ができるようにと、砂の入った桶、料理用具一式、料理用の薪を、船長は、ボートの中に用意しておくように配慮した⁶⁾。

ホノルルの「フレンド」紙は不吉な調子で、次のように書いていた。マクドナルドが「プリマス」号を去ってから、数日後、もう一艘のアメリカ捕鯨船「ウンカス」号が近くの海洋を航海していた時“マクドナルドの小さなボートのものだと思える舵を拾った…マクドナルドの小さなボートが、海岸に無事着いたか、それとも、大波に吞まれて沈没したかは、永遠の謎である”その後、殆ど1年近く、マクドナルドに関して、一言の報道もされていなかったため、この「フレンド」紙の最後の記事で、「マクドナルドは遭難した」と人々は信じ込んでしまった。

ハワイから日本海へ

マクドナルドが、日本冒険の舞台に、再び姿を現すするには、かなりの日時がかかった。1847年11月下旬、ハワイ諸島を出航してから、「プリマス」号と「ディビッド パドック」号⁷⁾は西へ進路をとり、マリアナ諸島に停泊、その後、小笠原諸島 (the Bonins) を通り、バターン島 (the Btanes, フィリッピン、ルソン島西部の半島、今日の台湾南の島) の周辺で大量の鯨の捕鯨に成功した。ところが、支那海域で、激しい暴風雨に襲われて、二艘の捕鯨船は、遂に、1848年1月15日にドック入りのため、香港の港に停泊することになった。香港で、船の整備をし、次ぎの日本海での捕鯨に備えた。フィリッピン人を新しく雇って、船員の強化もはかった。

ハワイ同様、香港でも、日本の話題でいっぱいだった。2月3日付けの地元紙「支那情報」(China Mail)は、次ぎのような記事を載せている。それは、日本に関する流言を否定したもので「イギリス、フランス、アメリカは、それぞれの国の軍艦を、支那に集結している。彼らの思惑は、自分たちの国の兵士たちが、日本で虐殺された復讐を日本に挑むためだ、といった類いの噂が、幾度も、中国人の間で広がっている。しかし、真実は、この3国の兵士たちが、日本で虐殺された事実もない。また、3国の軍艦が、香港に集結した事実もない」と断言している。

2月9日、ようやく、整備を終えた二艘の捕鯨船は、日本海に向けて、香港の港を出航した。二艘は、まず、新鮮な野菜を手に入れるために、最初、バターン島に向かって進路をとったが、バターン島に着いた季節が早すぎた。(それは、これから起こる数々の問題の予兆のようなものだった)そこで、今度は北の方角に進路をとり、琉球諸島を通過した。琉球諸島は当時、公ではなかったが、日本が琉球諸島を支配していた。その後、済州島の近くでの捕鯨に、かなりの日数を費やした。済州島は、朝鮮半島の南の海にあって、当時

7) 「プリマス」号、「ディビッド パドック」号の2艘は米国、ニューイングランド最初の捕鯨船である。

はクエルパート (Quel part) と呼ばれていた。マクドナルドは濟州島を大変美しい島だと思ったが、この島の戦略的な可能性に魅力を感じた。そして、この島の地の利から見て、イギリスが何故、この島を占領して、地中海の要塞の島、マルタ島のように、いわば、太平洋版のマルタ島のようにしないのか、不思議に思った。マクドナルドは、日記の中で「アメリカ全土でないにしても、オレゴンかカリフォルニアからの貿易が活発になるのは、そんなに遠くはない。オレゴンまで鉄道を伸ばすという、ウイットニー (Asa Whitney)⁸⁾の案が可決されないはずはない。日本が港を開いた時、濟州島は、中国と日本の両国に睨みのきく島となるのは目に見えている」と書いている。

3月26日に、遂に、二艘の捕鯨船は日本海に入った。日本海では、三ヶ月以上を捕鯨に費やす予定であった。地図でみると、日本海は、まるで、巨大な湖のように見える。その巨大な湖の西の果ては、アジア大陸、ロシア、中国、朝鮮半島である。湖の東側に日本列島、樺太諸島が、まるで、太平洋の荒波の効果的な防波堤のような形で存在している。日本海は比較的浅く、波が穏やかで、日本海流の一部が流れているので、北の端でも、比較的暖かい海である。当時の日本海では、鯨はゆっくり泳いでいて、捕鯨には絶好の穴場として、有名であった。深く海中に潜って、捕獲にはかなりな技術と勇気が要求される外洋での鯨の捕獲と違って、日本海での捕獲は、かなり容易であった。日本海での三ヶ月を、マクドナルドは手記の中で「いつも変わらないおだやかな海、中樺帆も張らないぐらいのそよ風、しかも鯨は無数にいた。船で鯨を追いかけることもなかった。ただ、ボートを下ろし、鯨を銚でしとめさえすればよかった。そして、銚でしとめた鯨を船体の横につけて、鯨の身体から脂を抜く作業をするだけでよかった」と書いている。

5月19日までに「プリマス」号の鯨油は、3800樽になっていて、目標の5000樽まで順調に進んでいた。季節に合わせて、船は北上を続け、狭いタートル海峡 (Tartary Straits) 近くに移動していた。この海峡で、日本海は、樺太とアジア大陸に挟まれて、ほとんどすき間のないぐらい狭まっていた。そこを通り抜けると、オホーツク海にでる。「プリマス」号は再び、進路を変え、大量の鯨を捕りながら、日本の方へと向かった。霧はますます濃くなった。

「プリマス」号と「ディビッド パドック」号は航海中はいつも一緒に行動していて、離れることはなかった。アメリカの捕鯨情報の新聞は、日本海で捕鯨活動をしている船の情報記事で充満していた。最後の捕鯨の場となった日本海での捕鯨の様子を、マクドナルドは「日中は、約20~30艘のアメリカ捕鯨船の姿が見られた」と書いている。捕獲された鯨の身体にはニュー ベッドフォード製の鉄の銚が刺さっていた。しかし、アメリカの捕鯨船を眺めていたのは、アメリカ人だけではなかった。宗谷岬の北の突端に配置されていた日本人の見張り人たちも、何十隻もの外国船を見張っていた。宗谷岬は、樺太 (サハリン) の向かい側の岬で、その間を通して、日本海は広い太平洋に流れている。しかし、日本人の見張り人の警戒は、殆ど効果がないものになってきていた。マクドナルドと同じ頃

8) Asa Whitney は1845年に米国太平洋岸に鉄道建設を提案した。

に、同じ海にいた「ウンカス」号の船員のジョナサン ニュートンは、日記に次のように書いている。ある夜、ジョナサンの船が偶然、日本の漁船と接触した。「ウンカス」号の船員数名が、ボートで、日本の漁船に近づいて、事故の様子を調べ、日本人たちに異常がなかったのを確かめてから、「ウンカス」号は航海を続けた。

危険な賭け

1848年には、アメリカの捕鯨船の乗組員たちのほとんどが、日本の陸地に降り立つことは非合法で、大変危険であると認識してはいたが、どうして鎖国令が発布されたかという最初の理由は知らなかった。ポルトガル人が最初に日本にやって来た1543年から1636年の間の約100年間は、日本には、ヨーロッパ人の貿易に携わる人々や、キリスト教伝道者たちがいた。特に、日本の西南地方では、多くの日本人がキリスト教に改宗した。日本人はかつては自分の考えで積極的に海外との貿易や、海賊的行為で、東南アジアに広く定住していた。実際、1612年には183人の日本の侍や貿易商人たちの代表団がメキシコまで出かけて行った。そのうちの一部の人々は、メキシコを更に東へ歩き、海を越えて、スペインからローマまでも行ったのである。一部は6年間もメキシコのアカプルコやメキシコシティに滞在していた。

しかし、この日本の国際化の時代は1635年頃に終わった。そのわけは将軍がヨーロッパ人（特にポルトガル人とスペイン人）が日本に深く侵入して、日本をキリスト教に改宗することを嫌って、国条例を敷いたのであった。キリスト教を広めることは死刑に値した。海外との接触は、南の端の長崎の港のみで、オランダと中国だけの交流に限られていて、それも、時たま朝鮮と琉球諸島との交わりにのみ限られてしまった。それ以外の点では、外国人はもはや日本にやって来ることはできない。また、日本人は外国に出ることは出来なくなってしまった。

鎖国令には、この法律が有効であった250年近くの期間を通じて、いろんな意味に解釈されてきた。1640年に、ポルトガルが、一艘の船を日本に送って、鎖国令が解かれるように頼んだのだが、その船は燃やされ、乗務員の大部分は殺された。1825年には日本に多くの外国船がやって来ているのに業を煮やして、将軍は悪名高い“打ち払い令”（the Uchiharai policy, 「撃退令」）を発した。その命令に従って、日本に近づくすべての外国の船は、災難の時にでも、自動的に、砲火を浴びせられたのであった。前に書いたように、マクドナルドが日本に侵入した10年前の1837年にも、「モリソン」号は、何人かの日本人漂流民（その中には3人の「吉」がいた⁹⁾）を、日本に還しにやってきたのだが、江戸湾で砲火を浴び、一発の弾丸が「モリソン」号の上甲板に穴をあけた。マクドナルドはこの事件を耳にしなかったと主張しているが、外国人の間では、日本は侵入不可能な、危険な

9) 「将軍の領土に乗り込んだアメリカインディアン(2)」大阪経大論集・第56巻第1号 p.123 及び〔附〕の「日本回想録」富田虎男氏訳及び同書の富田虎男氏の訳注、p.210を参照されたい。

尚、富田虎男氏の訳注の中では漂流した3人の「吉」のつく船員の氏名は、乙吉（音吉）、久吉、岩松（岩吉）であると書かれている。

国だという一般の神話ができて上がるのに、大いに役立ったのである。

1848年までには、「撃退令」政策は取り消されたが、外国の船は、まだ日本の陸地にはいることは禁じられていた。なにはともあれ、幕府の政策は外国を恐れていた。英国は結局、南アジア方面に勢力を拡大していたし、ロシアは、北方に力を伸ばしていた。アメリカの捕鯨船は何百隻という数で、日本の近海にうじゃうじゃ群がっていた。それでも、法律の緩和に伴って、船が難破したり、その他の緊急事態で捕鯨船の乗務員たちを、日本の国土に上陸させるような時には、当局は彼らに食事と飲み水を与え、早急に陸地から立ち退かせるか、もし、それが不可能な場合には、彼らを捕縛して、南の長崎の港へ送る処置をとった。そこで、不運な外国船の乗組員たちは、厳しい尋問を受け、マリヤ像やキリスト像の踏み絵を強制され、年に1度入港するオランダ商船に乗せられて、追放の運命を辿ることになる。

1848年までには、難破したアメリカの捕鯨船の船員への残酷な扱いに対しての大きな話が、アメリカの捕鯨船の乗務員たちの仲間の中で噂され、新聞紙上でも広くとり上げられた。そして、アメリカの政府が、この事態に何らかの手をうつべきであるという要求が出されていた。1846年に起こった、特に悪評高い事件のひとつが、日本の北の海岸で難破した捕鯨船「ローレンス」号の事件である。伝えられたところによると船員の一人が、牢から逃げ出そうとして、日本人の見張り人からひどい傷を受けた。マクドナルドは香港でこの情報を聞いていたが、「日本回想記」に「その事件の情報は、私に恐怖を与えなかった」と書いている¹⁰⁾。

敢えて危険をおかした理由

危険を十分承知していながら、どうしてマクドナルドは敢えて「プリマス」号を離れたのか、マクドナルドの目的は何だったのか、これらの最も中心的な疑問に対して、現存する記録は多様で、なかなか把握できない解答を提起している。多分、彼は多数の理由を持っていたのではないかと思われる。

マクドナルドは、生来好奇心が強かった。人生の終わりになって、マクドナルドは『この事件の動機は、白状するならば、私の持ち前の冒険心を満足させたかっただけだ』と述べている。このことは、1849年5月23日に、香港で行われて会見の中での記録には、「日本の国をくまなく探検したい野望」を持っていた、と書かれていることから、すでに「冒険家」マクドナルドという肩書きが容認されていたことは確かである。同じ1849年8月14日のニューベッドフォードの「捕鯨に従事する船員たちの船舶表」では、マクドナルドはもっと明白に「日本全土を探検して、自分で観察した記録を記事にしたい」と述べた、と記録している。

「プリマス」号を去る前に、父に宛てて書いた手紙では、当初はカリブ海（Spanish Main）で、船を降ろしてもらおうと考えていた、と書いている。この時点では、最終の冒

10) “the Narrative” p.162

険の目的地を、日本と限定していたのではなく、好奇心をそそる他の可能性も残していたと考えられる。しかし、特に、日本を選んだ理由として、1850年代に書いたと思われる「日本回想記」の草案には次のように書いている。

『その時代も、今も、不思議な王国を被っている神秘のバールがこの上もなく私の冒険心を引きつけた。どんな危険を犯しても、そのバールをはがしたいと思った。この国で、歴史、地理、商業、近代美術、聖書などの教師として雇ってくれるかも知れないという情報を得ていたので、教師として雇ってくれるのではないかと私は期待していた』

マクドナルドはまた、「プリマス」号船内の事情により、彼の計画が早められた事情もあった、と匂わしている。1849年、日本を去った直後の5月24日に、香港で、ホノルルの「フレンド」紙の出版者のサムエル デーモンに宛てて、次のような走り書きの手紙を出している。

『私自身の好奇心と諸事情が私を駆り立てなかったら、私が日本を訪れることはあり得なかったでしょう。あなたは恐らく覚えておられると思いますが、日本海から最初の捕鯨船団がホノルルに帰ってきた時に、日本海がどれだけ鯨で一杯だったか、と報告した時のことを。船積みなどで迷惑をかけることも予想がついていました。そのことはあなたにはよく分かっておられたと思いますが、ひょっとすると船員たちが死の犠牲にさらされるかもしれない状態の中でも、この鯨の宝庫の海を、船長は離れたがらないだろうということです。1847年に、ホノルルの港に帰着いた船員たちの多くが壊血病にかかっていたことも、あなたの記憶にはまだ生々しく残っていると思います』

19世紀の中頃には壊血病はそれほど珍しい病気ではなかった。船長たちは果物や野菜を補給することで、この病気を予防できることを、概ね承知していた。しかし、鯨が豊富で、上陸は危険極まりない日本海で、意地汚く捕鯨をしたい欲望が船長たちの考えの中にあっただけで、日本海に入ったら、出来るだけ長くそこに留まって、漁をしたかったのである。そこで、1847年に、ある新聞が「日本の近くのオホーツク海では鯨が沢山捕れるので、どうしても操業が長引いた」と指摘したように、またもや壊血病にかかる船員が増えて来た。マクドナルドが「プリマス」号を去ってから、香港で、新たに雇い入れた4人のフィリピン人の船員全員が壊血病に罹り、船の中で死んだのは、偶然の一致ではなかった。香港に帰港してから、エドワード船長はホノルルの新聞「フレンド」紙に次のように報告した。「航海中、私は船員の何人かを、船の中で屠殺した豚の熱い血の中に入れて、身体を

11) “A Sailor’s Attempt to Enter Japan” のタイトルで「フレンド」紙、1848年12月1日版に掲載。

洗わせたのだ。他に施しようがなかったので、この方法が壊血病に良く効くと思ったからである」

デーモンへのマクドナルドの走り書きの手紙にも、船を離れる無謀な冒険を敢えてした理由には壊血病も重要な理由であった。

『この不都合な事情を避けたいということも少しは考慮の中にあっただが、私の皮膚の色が白人とは違って、有色であったこと、顔かたちが日本人に大変似ていたことが、日本語と日本事情を学ぶ機会を逃したくなかった一番の理由であった』

1848年12月の「フレンド」紙に報告書を提出したマクドナルドの同僚の E.P.F. も、利尻島近辺で、マクドナルドが船を離れた時の印象を、もっと鮮やかに説明している。

『マクドナルドの意図は、日本の島に行って、滞在して、日本語にいくらか慣れて、そこから日本の首都、江戸に行き、イギリスかアメリカが日本と通商交流するする時に、通訳として雇われたいと思っていたのです。

他言しないようにと私に打ち明けた事柄も他にもありましたが、私は決して大ぴらにはしませんでした』

マクドナルドが同僚に打ち明けた秘められた動機は何だったのか。二つの動機が考えられる。マクドナルドは初期の「日本回想記」の草稿で、彼の古い友人の編集者マックラウドが、マクドナルド青年は『深いキリスト教生活の中で』育ってきた、と書いていることに触れている。このことは次ぎの事情を容易に説明してくれると思う。マクドナルドが身の危険にも拘わらず、小さなボートの中にまで、聖書と英国教会の祈祷書を持ち込んでいた。新教徒であり、永遠の楽道家でもあったマクドナルドは、後の「日本回想記」原稿の中で、これらの本を積み込んだ理由として『日本人がキリスト教を弾圧しているのは、キリスト教が、今までは、ほとんどがローマ カトリックとして知られていたもので、ローマ カトリックを非難しているに過ぎない』と書いている。マクドナルドは、キリスト教弾圧は最初の段階では、鎖国政策を制定させるための日本の政策であると考えていたようである。マクドナルドの草稿の中に見られる第二の可能性は、また真実味を帯びてひびくのだが、それは次ぎのことである。マクドナルドは当時はこのことを世間に明らかにされたくないのだが「私は若い頃は、表向きには貴族的な仲買人であったが、実のところは、我が国での権力を持った支配者に似たような人物として、私自身のことを考えていた。すなわち、日本人はみんなアメリカでのアメリカインディアンのような存在であると考えていた」¹²⁾

12) “the Narrative” p.155

海上での孤独な存在

マクドナルドは目的を実行するためには、鎖国の日本への不法侵入者としての身分を、監視人からごまかさねばならなかった。そこである行動計画を策略した。途方もなく飛躍した信念で、マクドナルドは、自分が難破した船乗りであるというふりをしたら、日本人でも、憐れみをかけてくれるのではないかと考えた。「嵐とか、どうしようもない事情で、日本の海岸に漂流したのだという振りをしたら、日本人でさえも憐れんでくれるに違いない」¹³⁾と考えをめぐらせた。

エドワード船長の記述では、船が帰途についた時、北緯35度、東経160度の地点で、日本の東で、北海道の南の方の、かなり太平洋に入った地点で、二人の間の取引をマクドナルドが思い出した、と書いている¹⁴⁾。もし、船長の記述が真実なら、「プリマス」号は一旦、太平洋に出て、日本海に引返したことになる。というのはマクドナルドはラ・ペローズ海峡つまり宗谷海峡の西の端、北海道と樺太の間の海峡で最後に船を離れたからである。マクドナルドは「日本回想記」の中で“海は霧が深く、陸地は見えなかった。「プリマス」号は帰途に向かい、私はそれと反対の方角に向かっていた。「プリマス」号は星条旗を数度上げ下げして、私に合図を送り、私は小さな白旗を上げ下げしてそれに応えた”と書いている。

マクドナルドはこの小さなボートに乗って、北東の方角に、航路をとった。軽く風が吹いていた。だが、マクドナルドが取った方角については、幾分議論の余地がある。というのは（日本から釈放された後で）1849年、アメリカ海軍に提出した供述書で、述べたものと、もっと後になってから、「日本回想記」の中の地図で指摘したものとの間に少し違いがある。どちらにせよ、マクドナルドは二つの小さな島に出会った。一つの島（多分、今日の天売島一テウリ）の近くで、岩や波を注意深く避けて近づいた。そこで、トドの群れの中に挟まってしまった。トドというのは12フィートぐらいの大きさの“トドアシカ”のことで、鳴き声はウオー、ウオーと低く太いうなり声で、犬の鳴き声と牛の鳴き声を混ぜ合わせたような鳴き声であった。マクドナルドはピストルの具合を試すために、一頭のトドアシカを狙って撃った。その後、もう一つの小さな島の入江に、ボートを乗り入れた。エドワード船長によると、この島は人が住んでいる島だということだった。しかし、その島には人影はなかった。この島の入江で、ボートの中で、二日間過ごした。「侵入」の計画を周到に練り直しながら、マクドナルドの言葉をかりるなら、それはまるで、“ロビンソン クルーソー”のような体験であった。しばらくの間、身を低くして、出会うかもしれない日本人たちが、自分が「プリマス」号に関係のある人物であるとさとらせないように、帝国への侵入をわざと遅らせようと考えた¹⁵⁾。

マクドナルドが最初に上陸した島、焼尻島はわづか3.3平方マイルの面積しかなく。双

13) *ibid.*, p.155

14) Gardiner, “In Portrait of the Golden Dream” p.14

15) “the Narrative” pp.153~155

子のもう一つの小さい島、天売島とは2.5マイルしか離れていなかった。日本列島の最も北の端の大きな島、北海道の西海岸からはよく見える焼尻島には、当時は、住民はいなかったが、実際は、東海岸の方には、日本政府の小さな前哨基地があった。マクドナルドは西海岸に上陸したものの、東の海岸までは探索しなかった。焼尻島（当時は、ヤングেশリー-Yangeshiri と呼ばれていた）の地域は、1746年から日本政府の前哨基地が設けられていて、主に、漁業、とりわけ鯨漁の主要な基地となっていた。

焼尻島から北の方角に「その島の中心からそびえ立つように雪に被われた山」のあるもう一つの島をマクドナルドは見つけた。この島が利尻島であった。その島こそ、もともと、マクドナルドが船長に母船から降ろしてもらった約束をしていた島だった。焼尻島から約10マイルの距離があるように思われたが、マクドナルドは、その島にたどり着こうと決心した。マクドナルドが、どうしてそのような決意をしたかは、現在でも謎である。焼尻島と利尻島の距離は実際は45マイル以上も北の方角に位置している。そして、利尻島はその当時、すでにヨーロッパの人々には良く知られた島であった。事実、マクドナルドも、ヨーロッパの船乗りたちと同様に、その島を「ティモシー」島と呼び慣れていた。マクドナルドの目的が、“知られないで、こっそり日本領域に侵入すること”であったのなら、利尻島ではなく、直接、東の北海道に侵入した方が筋が通っていただろう。3.3マイルの焼尻島や、114平方マイルの利尻島より、米国のサウスカロライナ州と同じぐらいの面積の、30,130平方マイルの広さの大きい島、北海道の過疎地域に上陸していたら、人に発見されることもなく、次ぎの行動計画を立てることができたと考えられる。

今日、利尻島に住んでいる人々や、内外からの訪問者は、マクドナルドが利尻島に漂流した理由を、霧の深い土手がマクドナルドの進路に影響したのだとか、北海道は、日本政府の役人たちに、あまりにも、きっちり支配されていたからだとか、あるいは、その島の方角に海流が流れていたとか、風がその方角に吹いていたからだ、とか憶測を立てている。人々の中には、利尻島の雪を被った山は、そのあたりでは、最も目立った目印で、マクドナルドの生まれ故郷のフッド山 (Mt. Hood) によく似ていたので、無意識のうちに、利尻島の方にひきつけられたのだろう、と憶測する者もいた。また、別の見方をする人もいた。利尻島の浜には、人々が住んでいるとマクドナルドは知らされていたので、自分の目的にとっては、まったく人が住んでいない無人島には上陸したくなかったからだと推測する人もいた。もし、しばらくの間にせよ、陸地に住みたいというのが、利尻島に上陸したマクドナルドの目的だったら、恐らく、彼は二挺のピストルではなく、長い鉄砲を母船から持ち出ただろう。

そのような憶測は別として、6月30日に、マクドナルドは、実際に、利尻島に上陸する前に、遭難（マクドナルドはこの行為を“destitute”という言葉を使っている）したふりを意図して、公海で自分の乗っている船を、わざと転覆させることをやってのけた。焼尻島でもう一泊した後、7月1日に利尻島に向かって、北へ進路を取った。午前10時頃、利尻島からはまだ5～6マイルも離れたところで、帆を張ったままで、暗礁をさけようとして遭難に見せかけようとして、船を転覆させたと述べている。転覆させる前に、船員用

の荷箱のカギをかけ忘れていたので、沢山の品物を失ってしまうことになった。箱の中には多くの衣類、ピストル一挺、数冊の書物、ボートの水を汲み出す用具、ボートの方向舵までも（この方向舵が「ウンカス」号に発見されて、マクドナルドの死亡説が流れた）失ってしまった。この喪失にもへこたれないで、彼は「帆柱を抜き取り、ボートを元にもどし、帆柱を付け直して、陸地に向かった」もう一度ボートを島に近づけた時、マクドナルドは、ボートから振り落とされる災難に会った。かろうじてボートまで泳いで難を免れた。その夜は、海岸に上がらないで、ボートの中で一晩過ごした。遭難に会ったと見せかけることも可能だっただろう。エドワード船長が「プリマス」号で、気に入ったボートをマクドナルドに選ばせたが、マクドナルドは日本を去る時に「あんな大した装備もないケチなボートと引き換えに、船での給金全部を船長に与えたことを後悔した」と愚痴っている。

7月2日の夜明けに、マクドナルドは利尻島に人家の煙を見かけた。そして、小さな村落から、かなり大きな伝馬船に乗って、自分の方に近づいてくる数人の男達を認めた。マクドナルドは自分のボートの栓を抜いた。船に水を満たして、遭難にみせかけた。そして、近づいてきた男達に、このボートを繋いで、利尻島の海岸まで引っ張って行ってくれるようにしむけた。男達が近づいてきた時に、マクドナルドの言葉によれば、「男達はマクドナルドに一礼し、そして“サラーム、salaam”（額手礼）をした。その後、両手でヒゲをこする仕草をし、両手を前に伸ばして掌をこすりながら上下し、腰をかがめ、喉からしぼるような音を発する挨拶が続いた。私の方はいろいろしてきた。いつまでも、絶え間なしにこのような仕草が続いた」そうである。

実は、マクドナルドが、ここで出会った人々は、昔からその土地に住んでいたアイヌ種族だった。彼らはボートを海岸に引っ張る手助けをしてくれた。マクドナルドが目には、美しい緑の木々に囲まれた村落のように見えた。マクドナルドは（日本人が習得している大変高度な文明のことを耳にしたり、本で読んだりしていたので）この人たちについて行って、彼らの裕福な主人に保護される自分の姿を想像した。しかし、海岸では、もっと多くのアイヌの人たちに出会った。みんな、ボートの牽引の時に会った仲間と同じように丁寧に挨拶をした。かなりな敬意を払いながら、うやうやしくマクドナルドの足に草履を履かせ、「優しく手をとって」「険しい岩の多い土手を登る手助けをしてくれた」

「そこで私が目にしたのは荒れ果てた不毛の土地だったので、大変驚いた」とマクドナルドは書いている。「麦の穂か、穀物畠だと見間違っただけでなく。ただの雑草が生い茂っていただけだった。こんな雑草の中を歩いて、何しろ草履で歩いたことがなかったので、何度となく、雑木の根っこに足をとられて、転びそうになった」アイヌ人たちは、マクドナルドを村に連れて行ったが、村と言っても、その村は「一軒の大きな木造の家と、それを取り巻く粗末なあばら小屋」の村だった。実は、マクドナルドが到着した場所は、利尻島の東北海岸の野東村だった。この村で、彼は、はじめての日本人に出会った。この人物は「相当な地位の男性」であると思われた。「頭は前面を剃って月代にし、ちょんまげを結っていて、衣服、長い木綿の衣服を広い帯で身体に巻いていた。草履を履き、衣服にはゆったりした袂がついていて、エписコパルの僧侶の服装のようであった。その服装

から、私は、その人物は僧侶だと思った」母屋に案内されて、草履を脱ぐように指示され、マクドナルドは、ある一部屋に通された。濡れた衣服を脱いで、代わりに、ガウンを着せられて、ご飯と、焼き魚と、貝と、お漬物の朝食を与えられた。マクドナルドはこうして、野東で10日間過ごした¹⁶⁾。

* * *

〔 (1) (2) (3) と訳していて、マクドナルド著、ウイリアム ルイス・村上直次郎編の *Ronald Macdonald-The Narrative of His Life, 1824-1894* の原著から理解に必要なカ所を引用する必要があると感じた。訳者が必要、あるいは参考にしてほしいカ所を、註1)に記した「日本回想記」富田虎男氏訳及び訳註から転載させていただく。〕

〔附1〕

“the Narrative” (p.120～) の富田氏訳「日本回想記」(40頁～) から転載
(富田氏訳は縦書きのため、横書きにしたが、他は原訳のまま)

四章 日本渡航の志

(日本人音吉らの漂着)

私がどうして日本のことを考えるようになったのか、それはつぎのような事情からだった。

コロンビア川流域とその北方の太平洋岸地方の場合、前に述べたように、日本は、われわれとの間に横たわるおだやかな海、つまり太平洋一つを隔てた隣国だった

当時日本は、200年以上もの間、国法によって、世界に門戸を閉じていた。例外は中国人とオランダ人だが、彼らも非常に厳しい制限をうけていた。日本に接岸することは、ほかの外国人にとって、いや、理由のいかんを問わず、外国の国土にいて国を留守にしたり、外国船に乗って国を留守にした日本人にとってさえも、死を意味していた。難破船の船員さえも、十分な武力をもった外国の軍艦によって偶然にしかも迅速に救助されないかぎり、遅かれ早かれ、死の刑罰をうけなければならなかった。

この事実は、コロンビア川流域地方のハドソン湾会社のわれわれにもよく知られていた。少なくとも一度か二度、同社はコロンビア川流域地方やその北方の海岸に、難破して打ち上げられた日本人漂流民を取り扱わなければならなかった。この漂流民は、南西モンスーンのように定期的に吹く風によって、また北太平洋の「湾琉」(日本語の学名命名法で、「大きな黒い川」を意味する)黒潮によって、こちらの岸まで運ばれてきた。

なかでもよい例は、まだ生き残っていた三人の船員を乗せてクイーン・シャーロット島に打ち上げられた日本の平底帆船の場合だった。それは魚を積み荷した、あるいは、一部魚を積んだ小さな航行不能の船だった。それは一八三六年のことだった。島の先住民は習慣にしたがって、この三人を奴隷にした。先住民は旅の途中、この三人をヴァンクーヴァー島に連れてきた。同島で三人は買いもどされ、当時コロンビア川流域のハド

16) *ibid.*, p. 158

ソン湾会社の権益と、イギリスの勢力圏内の太平洋側斜面全体をとりしきっていた交易所長ジョン・マクラフリン博士（彼については前にもふれた）に預けられた。彼らの窮状に同情した博士は、このような場合にぶつかったときの彼の習慣どおりに、まじりけのない人類愛から、三人をコロンビア川流域のフォート・ヴァンクーヴァーにある自分の家庭まで連れてきて、なにくれとなく面倒をみてやり、そこから、彼の会社の船に乗船させて、ホーン岬経由でロンドンへ送った。ロンドンから、彼は中国のマカオへ移され、マカオでは著名なイギリスの宣教師ギユツラフ師に預けられたが、その際、日本との貿易に従事している中国船か他の国の船で、彼らをできるだけ早く祖国へ復帰させよという訓令書と資金もそえられていた。

[附2]

富田虎男氏「日本回想記」訳註（p.210）より

… 乗務員は、小野浦の良参寺に現存する過去帳によれば、福嶋源六、仁右衛門、金右衛門、三四郎、弥左衛門、武右衛門伴吉次郎、武右衛門伴乙吉、又平伴久吉、六右衛門、野間村政吉、伊勢国若松千之助、宮宿岩松、新居浜勝五郎、伊勢波切辰蔵の十四名である。… このうち生きて漂着した三名は、乙吉（音吉）、久吉、岩松（岩吉）である

*三名の漂流民に関して、富田氏は訳注の中で詳細に訂正と他の資料を紹介している。

[附3]

“the Narrative”（p.152～）、富田虎男氏「日本回想記」p.68～

[漂流を偽装する]

このように私がゆっくりしていたのは、母船と別れてから日本と接触するまでの間に、十分な時間をとって、私が日本の岸辺を自ら進んで探索したという疑惑を未然に防ぐためだった。私は母船が土地の人に見られたかもしれないと思い、私がどのようにして、またなぜ、母船を離れたのかについて、厳しい尋問にあうだろうと予想していた。

北方10マイル [実際には約70キロある] ばかりの遠方に、私はもう一つの島 [利尻島] を認めた … 航海をさらに続ける前に、荷物を陸揚げしてから、わざとボートをひっくり返し、自分でちゃんともどおりにもどすことができるかどうか、たしかめようとした。こんなことをしてみたのは、私自身が遭難にあったさまを演出してみようと思ったからだ。なぜなら、外国人に対する日本人の評判高い残酷さにもかかわらず、日本人でさえ、嵐とか不可抗力の事情で日本の浜辺に打ち上げられた船乗り仲間に対して、同情ぐらいは寄せるだろうと思い、半ばそう信じたからだった。不幸は、どんな場合にも通用するパスポートではないにしても、ある場合に通用することはたしかだ。それを利用して、あるいは不幸と見せかけて、私は日本の堅く閉ざした門をくぐってみようと決心した。

船着き場の役を果たしてくれた小さな入江を出て、二つの島の間の深い海まできたと

き、私は縮帆部を広げ、帆を揚げたまま、わざと船を転覆させた。そのあとマストの後方支索をといて投げ、マストを檣座からはずして、帆をもやい綱にしばりつけ、そのあとセンター・ボード〔垂下竜骨〕をつかんで船をもとの状態にもどして水をかい出した。もとの状態にもどしたとき、ボートの中にあったのは、二樽の水、食料品の小樽、それにベッドだけだった。箱や櫂や舵は漂っていた。箱と櫂はなんとか取りもどした。舵は流されていくのにまかせねばならなかったのだ。方向をとるために櫂を取りもどしたのだ。この結果に満足して、私の島にもどり、島でもう一泊（六月三〇日）した。

〔附4〕

富田虎男氏「日本回想記」(p.73～75)

〔利尻島に上陸〕

上陸する際、私は先刻四人の船乗りからうけたと同様の歓迎の挨拶を、浜辺にあぐらをかいて坐っていた人びと——約100人の男女子供たち——からうけた。船乗りのうち二人は、女の一人から一足の草履をうけとって、私にはかせた。それから二人はおもむろに私の手をとって、急な岩の坂道をのぼるのを手伝ってくれた。

遠方からみて、農家とよく耕された土地のある農場だと思っていたものが、実際には雑草とシダの繁った不毛の荒地であることに気づいた。そこを通過して進んでいく間に、私の足は幾度も柴の切株にふれ、まだ草履を履き慣れていなかったもので、しょっちゅうつまづいた。大きな家までの半分ほどきたとき、私は案内人にそうせかせるなど声高にいった。案内人は、私の身振り顔つきから、なにか不満なことがあると察して、許しをこうかのように手をすり合わせ始めた。彼らの感情をこれ以上損ねないように、私は腰をかがめて草履の具合を調節する格好したら、彼らは私にそうさせまいとして、彼ら自身の手で調節してくれ、親切な行為をする機会ができたことを喜んでいるようすだった。それから先は私の歩調に合わせてくれた。

さきに述べた大きな家に近づくと、一目で有力者とわかる日本人が出迎えていた。彼の前頭部はそり上げられ、髪はてっぺんで束ねられていたて、前頭部に少しつきだした辨髪のようなものだった。服装は聖職者が着るような木綿の長いガウンで、広い帯で身体にまきつけられていた。多分牧師だろうと思って、私は帽子に手をあて軽く会釈した。彼は男たちになにか命令を下した。そこで案内人は私の手をつかみ、ほかのものはさっと引きさがつた。私は牧師らしき人物のあとについて家にはいった。



1848年6月27日～30日にかけて、マクドナルドが母船を離れてから、蝦夷（北海道）から少し離れた焼尻島にたどりついたルート地図、ラナルド・マクドナルドのスケッチから編集したもの（The Narrative of His Life, 1824～1894）から転載（下記ルートの説明は中川の訳）

- | | |
|------------------------------|-----------------|
| A. 母船を離れる | H. アイヌの船にであった場所 |
| B. 母船の進路 | I. 上陸した場所 |
| C. 最短の島への私の進路 | J. 村落 |
| E. 目にした最初の島、この島で、ボートの中で二日過ごす | K. 雪を被った山 |
| F. はじめて、ティモシー（利尻島）を目にする | L. 泊へ歩いた道 |
| G. ボートを転覆させる | M. 泊 |
| | N. ジャンク船が停泊 |
| | O. 宗谷への道 |